

HENRY

[ヘンリー]

PORTRAIT OF A SERIAL KILLER

'90シツセス国際ファンタスティック映画祭

グランプリ・批評家賞・監督賞、3部門受賞

監督ジョン・マクノートン衝撃のデビュー作

彼は、人を殺す前に必ず上着を脱いだ。





「羊たちの沈黙」の衝撃を越えた「ヘンリー」

アメリカはもとより、日本でも静かながら無気味なブームを呼んだジョナサン・デミの傑作「羊たちの沈黙」。今年、この衝撃の作品を越えられるのはジョン・マクノートンの幻のデビュー作「ヘンリー」しかない。

実際、この「ヘンリー」は「羊たちの沈黙」に先駆けること5年早く作られた、早過ぎた傑作だったのではないか。アメリカでも、数年間のオクラ入りを余儀なくされている。ありきたりのホラー映画として企画されながら、ホラーにさえなっていない、というのが表向きの理由だが、この映画の真価が評価されるには、90年代という時代を待つ必要があった。

本来、ジョナサン・デミはカルト的な作家である。「羊たちの沈黙」も仮にもう1、2年早く作られていたならば、これだけのブームを呼べたかどうかは疑問である。この作品のヒットは、明らかに湾岸戦争へと突入り、湾岸戦争を通過したアメリカが要求した「無自覚のバイオレンス」といったものに呼応したからだ。それに比べられる沈着された暴力的恐怖が漲っていたからである。本当に、これ程怖い映画はここ何年も見たことがなかったのではないかと。

だが、「ヘンリー」はさらに怖い。これに比べれば「羊たちの沈黙」など所詮、愛嬌のあるハリウッド映画に思えてくるから凄。このインディペンデント映画も、要求される「無自覚なバイオレンス」に比べてあまりあるのだ。

まずもって、主人公にヘンリー（「デイズ・オブ・サンダー」のマイケル・ルーカー）の殺人がまったく無自覚である。腹が減ったからメシを食うように、そこにジャマなものがあるからひよいとヒネリつぶす感じで人を殺してゆく。腹が立っているのかどうかさえ定かではない。心の痛みは当然ない。あの「13日の金曜日」のジェイソンでさえ、それなりの殺す理由めいたものはあったが、ここには一切ないのだ。性の潔癖性、近親相姦あるいは虐待めいた過去を多少におおせはするが、ヘンリーの描写は極めて即物的である。

同時に、その殺人描写というのも、この映画では一切描かれないのだ。あったとしてもビデオ・カメラを通じてハッキリしない描写がほめかされるぐらいである。ここが映像的にも面白いと思う。これでは我が映倫も、アメリカのMPAAも文句のつけようがないのだ。「羊たちの沈黙」も意外や直接的残酷描写はほとんどなかったが、このあたりも相通じるものがある。

かといって、観客の想像力にゆだねて直接描写を避けたといった、往年の良き時代のホラーの在り方とは全く違う。ここでの描写の欠如は、ヘンリーの罪悪感の欠如そのものなのである。おそらく、殺しつつあるヘンリーの目には、このように何も映っていないに違いない。無自覚の視覚化なのだ。ただ画面に提示されるのは、長廻りして撮られた死体である。そこに殺害時の効果音がかぶさる。この興味深い演出法がもたらす効果は、監督自身の言葉を借りるなら、「観客の逃げ道を奪う」ことだ。ジョディ・フォスターと共に、レクターの心理に同調してゆく恐怖に震えた「羊たちの沈黙」同様、ここで観客は徹底的にヘンリーの側へと、無自覚なバイオレンスへと追い込まれてゆくのである。

従って見終った直後は口も聞かなくいほどムカムカする、というのが当然の、正常な反応というものだ。この作品がグランプリを受賞した90年のシッチェス映画祭で初めて見た時、やはり私もそうだった。「悪魔のいけにえ」を最初見た時の感覚にも似ているがしかし明らかに違う。共に実話がベースとされているが、「ヘンリー」は生理よりも心理を追撃し、観客のリアルな欲望を暴き出さずにはおかないのだ。最近のホラーはSF Xのこけおとしだけで、心理描写がないからダメ、とかのたまっていた偽善者は、さて何と言うだろうか。

いや、ホラーという枠組みなどどっくに越境した「ヘンリー」は、それゆえにこそ「羊たちの沈黙」と共に、来たるべき90年代型映画の指標の一つとして、正当に評価されなければならない。

いずれにしてもマクノートン監督は、既に第4作目「マッド・ドッグ & グローリー」をマーティン・スコセッシ製作総指揮のもと、ロバート・デ・ニーロ主演、ビル・マーレー共演でユニヴァーサルのために製作中である。ギャングものとも探偵ものとも囁かれているが、ここで一気にメジャーへ浮上することは確実だ。他に比類なきその演出感覚の新しさ、重さは、90年代のバイオレンス・シーンを疾走、この世紀末に一時代を画することは間違いないのである。

塩田時敏(映画評論家)

イラストレーション 滝野晴夫 デザイン 野村高志



PORTRAIT OF A SERIAL KILLER

監督 ジョン・マクノートン

製作 ジョン・マクノートン、リサ・デモンド、スティーヴン・A・ジョーンズ

脚本 リチャード・ファイヤー、ジョン・マクノートン

主演 マイケル・ルーカー、トム・トールズ、トレーシー・アールド

1986年/アメリカ映画/83分/カラー

第23回シッチェス国際ファンタスティック映画祭
(スペイン・バルセロナ'90年10月)

グランプリ・批評家賞・監督賞、3部門受賞

オポルト国際映画祭(ポルトガル'91年2月)

グランプリ・最優秀脚本賞・主演男優賞(マイケル・ルーカー)

主演女優賞(トレーシー・アールド)4部門受賞



90年代アメリカ映画界で、最も注目される監督 ジョン・マクノートン



1949年生まれ。'72年にTV制作と写真を専攻した大学を卒業。以来、工場勤め、広告代理店でのビデオ制作、巡業カーニバル付写真家としての旅、またロック・ビデオ、TVドキュメンタリーの制作を経て、'86年に「ヘンリー」を監督。製作後4年目にして'90年3月ニューヨークで公開されるヤマスコミの絶賛を浴び、一躍その名を高めた。'88年「The Borrower」(製作会社倒産のため今未公開)、「91年、「トーク・ラジオ」などのエリック・ボゴシアン舞台を撮った「Sex Drugs, Rock & Roll」を製作。現在、ユニヴァーサル映画「Mad Dog & Glory」を製作中。製作総指揮にマーティン・スコセッシ、主演ロバート・デ・ニーロ、ビル・マーレーで、いよいよマクノートンのメジャー進出となる。

3月19日(木)より 独占ロードショー

特別鑑賞券好評発売中/¥1,300(当日¥1,700の処) 連日(土・日は除く)9:10PM上映(終映10:40PM頃)

新宿武蔵野館 新宿駅中央口・三越ウラ
TEL 03(3354)5670

すべては、娼婦の子宮からはじまった

360人もの人間を殺し続けた殺人者ヘンリー・ルーカスに直撃インタビュー

「死の腕」ヘンリー・ルーカス物語

定価2000円(本体1942円)

全国書店で絶賛発売中!

マックス・コーラー著 河合修治訳

発行 中央アート出版社(TEL.3561-7017)